

特別図書資料解説

ショーペンハウアー
『意志と表象としての世界』初版について

総合政策学部教授 鎌田 康男

ワイマールのショーペンハウアー博士

1813 年秋のこと、イエナ大学で哲学博士の学位を取得した若きアルトゥーア・ショーペンハウアーは、母ヨハンナ、妹アデーレの住むワイマールに意気揚々とやってきた。さっそく学位論文を母に見せる。ところが母は『充足根拠律の四方向に分岐した根について』（以下『根拠律』と略記）というタイトルを見て、「それはひょっとして薬剤師の本?」と尋ねる。からかっただけでも知れない。しかし得意の絶頂にある 25 歳の青年は、母親のこの言葉におおいに傷つき、不快の感情をあらわにする。「無学な奉公女ならともかく、ポーランドの貴族の称号を持ち、教養と才気とを賞賛される母の祝福の言葉がこれか。」148 ページの短い博士論文ではあるが、そこにはカント哲学を独自の仕方でも継承発展させたショーペンハウアーの主著、725 ページにおよぶ『意志と表象としての世界』（1819）の理論的な基礎がしっかりと描かれていた。実際、主著の序文でショーペンハウアーは読者に、はじめに『根拠律』を読んでおくよう



手前左がワイマールのシラーの家。奥の建物の位置に、ヨハンナ・ショーペンハウアーが住んでサロンを開いていた。

にと念を押している。ただし、現行のショーペンハウアー全集には、1813 年の初版ではなく、約 1.7 倍に増補された 1847 年の第 2 版が収録されており、こちらのほうがたしかに読み応えはあるが、ノイズが増えて、ショーペンハウアーの哲学的な枠組みを読み取ることはかえって難しくなった。

ヨハンナ・ショーペンハウアーは 1806 年のナポレオンのヨーロッパ進攻以来、ワイマールの宮廷で重要な人物であった。シラーは前年に他界していたが、そのシラーの家の隣に居を構えた。週 1 回催された彼女のサロンには、ゲーテをはじめ、ワイマールの名士、文人たちが集まったという。若きショーペンハウアーは、社交辞令の嫌いな気難しい青年であったが、それでも母のサロンでさまざまな文人や学者に出会い、多くの文化や思想を学んだ。ゲーテを通して色彩論に興味を示し、インド学者フリードリヒ・マイヤーを通してインド哲学に関心を持つ。ゲーテは自分の光学実験装置をショーペンハウアーに貸与した。その成果であるショーペンハウアーの『視覚と色彩について』は 1816 年に刊行された。しかし母の派手な社交的態度に、青年哲学者ははじめなかった。実直な実業家であった父を模範として育った彼は、父の死後、母や妹がワイマールに去ってしまった後も、その商社を引き継ぐつもりでハンブルクに留まり、実業家としての修行を続けていた。しかしさまざまな事情から研究者として再出発することになり、1807 年ハンブルクを去る。それは簡単な決断ではなかったはずである。その懊悩と、それに続く強い決意とが、表面的で派手な母親の行動に対する反発感情を強めたことは十分予想できる。そしてなによりもアルトゥーアは、父の死後さっさと恋人を作ってしまった母親が許せなかった。



王立図書館（日本宮殿）庭園よりドレスデン旧市街を眺望する

花の都ドレスデンの青年哲学者

ワイマールでのさまざまな出会い、ことに、壮大な世界観によってそびえ立つゲーテとの直接の交流が彼に与えたインパクトは決定的であった。若きショーペンハウアーの哲学的基盤は確立したものの、それはまだフレームワークに過ぎないことを思い知らされる。内実を埋め、個々の未解決の問題を克服し、世界全体を包括するような哲学体系を完成するために必要な研究量は膨大なものであった。再燃した研究への情熱と、母妹とともに送る表面的な社交生活への不満とは、アルトゥーアをワイマールから新たな開かれた世界、花の都ドレスデンへと向かわせるのである。

ドレスデンは神聖ローマ帝国解体（1806）によって成立したザクセン王国の首都であり、国王フリードリヒ・アウグスト1世はナポレオンと対仏大同盟とのパワーバランスのなかでの舵取りに苦心しつつも、文芸を手厚く保護していた。1813年の諸国民の戦い以降、どっちつかずの国王はプロイセンに拘束され、ドレスデンはロシアの支配下に置かれた。しかしその戦禍と荒廃のドレスデンでさえも、ショーペンハウアーには十分魅力のあるものだったようだ。今からちょうど200年前にあたる1814年の5月1日にドレスデンに到着した若きショーペンハウアーは、町の一等地である大聖堂前のアパートを借りた。彼はこの住所をドレスデンの全

滞在期間中にわたって連絡先として維持するのだが、やがて本拠をショーペンハウアーの最大のお目当てであった王立図書館の筋向かいに移す。日本宮殿と呼ばれた図書館まで歩いて1分とかからないところである。こうしてショーペンハウアーの主著『意志と表象としての世界』への長い道のりが始まった。そして、4年あまり後の1818年末（奥付は1819年）に本書は出版され、ショーペンハウアーはイタリアへと旅立っていった。

意志と表象としての世界

若きショーペンハウアーがカント哲学およびドイツ観念論を批判的に受容しつつ、独自の道を切り開いていった



ドレスデンのシンボル・聖母教会。
右手最奥のクリーム色の建物に若きショーペンハウアーが居を構えた。

„Die Welt ist meine Vorstellung:“ — dies ist eine Wahrheit, welche in Beziehung auf jedes lebende und erkennende Wesen gilt; wiewohl der Mensch allein sie in das reflektirte abstrakte Bewußtseyn bringen kann: und thut er dies wirklich; so ist die philosophische Besonnenheit bei ihm eingetreten. Es wird ihm dann deutlich und gewiß, daß er keine Sonne kennt und keine Erde; sondern immer nur ein Auge, das eine Sonne sieht, eine Hand, die eine Erde fühlt; daß die Welt, welche ihn umgiebt, nur als Vorstellung da ist, d. h. durchweg nur in Beziehung auf ein Anderes, das Vorstellende, welches er selbst ist. —

『意志と表象としての世界』本論冒頭部分（原典 p.3）

「世界は私の表象である」— このことは、生きて認識するあらゆる存在に妥当する真理である。とはいえ、人間だけがこの真理を、反省と抽象との助けによって自覚することができる。そしてほんとうにこのことを自覚するならば、そのときその人には哲学的な思慮が生まれ出たのである。哲学的な思慮が生じると、以下のことが明らかで確実なものとなる。すなわち、人間が知っているのは太陽や地球そのものではなく、ただ太陽を見る目や地球に触れる手を知っているに過ぎない、ということであり、彼を取り巻いている世界は表象として存在しているだけだ、ということである。すなわち、世界はそれとは別の、世界を表象するもの、すなわち人間との関係性のうちに存在するということである。

（筆者訳）

プロセスは、筆者が35年あまり取り組んで来た課題であり、研究の詳細は末尾に紹介する文献を参照いただきたい。実際に『意志と表象としての世界』を手にとってみれば分かるのだが、ショーペンハウアー哲学は、哲学史家ヴィンデルバントが「色とりどりのモザイク」と表現したように、多様なテーマ群が混在して、統一的な像を取り出すのは容易でない。以下に、ドレスデンで完成を見たショーペンハウアー哲学の根幹をできるだけ簡潔に述べてみたい。

主著本文は、次の文章で始まる。「世界は私の表象である。」つまり、私を取り囲み、私の中に生を受け、生き、死ぬこの世界は、私の表象 — 心に描かれたイメージに過ぎない、というのである。多くの人はこれを身勝手な自己中心主義だと言う。さらにショーペンハウアーはたたみかけて言う。これはまだ半分の真理である。残りの半分は「世界は私の意志である」ということだ、と。世界が私の意志通りになるなど、幼児期的な夢想到ひといひ — そう決めつけたくなるのは、ごく普通の感情である。しかし、ほんとうにそうだろうか。

ショーペンハウアーは実業家として育てられた。典型的なヨーロッパ近代市民である。では、近代市民の特徴とは何か。伝統社会においては、既成の秩序や価値は神に保証された真理であり、私たちの思考や意志に関係なく確固として存在するものと見なされてきた。ひとはそれらに異議を唱えず従順に従うべきものと考えられてきた。それが政治的、経済的、文化的な旧体制（アンシャン・レジーム Ancien Régime）を支えた。しかし近代市民はそのような伝統に抗して、自ら新たな理念や目標を設定し、それらを実現する権利、すなわち自己決定権（自律 autonomy）を求める。自己決定のためには、存在秩序や価値観を他から押しつけられるままに受け入れるのではなく、みずから理想を生みだし実現する能力 — 創造的な表象能力とあらゆる困難を克服する強い意志 — が必要である。私のイメージする通りの理念や目標が実現されるなら、私の表象と意志とが世界になるのである。



アルトゥーア・ショーペンハウアー
(1788 ~ 1860)
この肖像画はドレスデン滞在中の
1815年に描かれた。

自由な思想のツールである言論を駆使して、神に授けられたと称する既成の王権を否定し、あるべき理想の社会を心に描き、その理想を政治的に実現しようとする市民は、表象と意志によって世界を形づくる。伝統的なギルドの規則を破棄し、新たな商品を開発し、新たな市場を開拓し、新たなマネージメントを案出する自由競争的な企業家は、その経済活動によって表象と意志の世界に生きる。現実世界とは関係ないように見える文人や芸術家たちも、新たな表現形式や新たなテーマを産みだして独創性を競う。彼らも、表象と意志としての世界に生きているのである。では、哲学者はどうだろうか。物それ自体をあるがままに認識できると考え、それゆえに認識は対象に依拠すべきである、と考える従来の哲学的旧体制をカントは斥け、対象は人間に備わった認識の形式に従って現象してくるのだ、と

シャーに生きながらも、そのプレッシャーが存在するさま、およびそこに生じる問題を示すこと、そして可能なら、思考の転換による問題解決の道筋を示すことである。「意志と表象としての世界」は、まさに私たちが生きる近代の世界の根本的な構造を分かりやすく示す独創的表現である。哲学とは、何らかの目的を実現するための道具ではない、むしろ、あらゆる営みがとり行われる世界のありさま、その営みの構造を描き出すこと、それが哲学の使命である。哲学とは、概念を素材とする芸術活動である。哲学においては、自己を反省することなく盲目的にただ生きようと欲する意志と表象の仕組みが明らかにされ、またそれによって起こるさまざまな悲慘と苦悩とが描かれる。これにたいして、第二の問題解決の道筋としてショーペンハウアーが提示するのが意志の否定と共苦の哲学である。

意志の否定と共苦の哲学

ショーペンハウアーは、絶えざる新しい価値の創造への意志が、その輝かしい進歩をとげると同時に、人間性の恐るべき脅威ともなることが明らかになってゆく 19 世紀の生き証人である。一般民衆が、意志と表象としての世界の創造者へと成り上がるサクセスストーリーに陶酔したのとは反対に、はじめから近代市民として生まれ育ったショーペンハウアーは、意志と表象としての世界の裏面をも知り尽くしており、そのような安易な楽観主義に同意することはできなかった。意志と表象としての世界の相において、生きとし生けるものはみな — 自己自身について冷静に反省しない限り — 他の生を犠牲にしてでも自らの生の保存と享樂とを欲する。もっとも、真実のところは、性欲の満足を通じて種の保存に奉仕するに過ぎないのだが。種の保存の役目を終えた個体は、惜しげもなく死というごみために捨てられるのである。

生への意志が強ければ強いほど、他の生の苦しみを増加する。「ただ私の利益と欲望が満たされていさえする限

り、私の隣人に一度に十もの被害が起きようとも、それが私に何の関わりがあるというのだろう」（マルティン・ルター『商業と高利』『世界の名著〈18〉』、中央公論社、1969 年、p.336）とうそぶく自己中心的な商人を憂いたマルティン・ルターや、更には高慢を「死に至る罪」（7 つの大罪）の筆頭にあげていた中世キリスト教倫理の延長線上にショーペンハウアーの思想を位置づけるなら、近代の裏表を知りつくしたショーペンハウアーが中世神秘思想や仏教にいだいた親近感も理解しやすくなる。

人間らしさの回復は、そのような盲目で制御不能になった生への意志を鎮静することによって可能になる、とショーペンハウアーは考える。それでは、実際に意志を否定した者の生き方とはどのようなものであるだろうか。ショーペンハウアーは、道徳の究極は、エゴイズムの克服にある、という。そこから共苦（compassion, Mitleid）の倫理が導き出される。エゴイズムとは、自己の利益や享樂を最優先させる立場である。エゴイズムを克服することは当然、自己の対極にある他者、利益や享樂の対極にある苦、すなわち他者の苦しみに関心を向けることになる。他者の苦しみを緩和しようと願う相互扶助の思想は、ヨーロッパ・キリスト教の長い伝統においても重要な位置を占めてきたのだが、近代市民社会において急速に失われていったこの共苦の思想を、近代的な文脈においてよみがえらせる思想の先駆けの一人がショーペンハウアーの倫理学であったといってもよい。それは、規範倫理学、功利主義的倫理学、などの既成の倫理学が克服できない問題の解決に重要なヒントを与えてくれる。

『意志と表象としての世界』が後世に与えた影響

『意志と表象としての世界』が刊行されると、ジャン・パウル、ヘルバルト、ベネケをはじめとした当時の著名な文人や哲学者たちが書評を書いた。しかしその思想は、当時の教養大衆にとっても講壇哲学者たちにとっても、あま

りにも先進的、創造的すぎたのである。ショーペンハウアーは、哲学界から忘れられていくかに見えた。ショーペンハウアー哲学の再発見は、予想もしないきっかけから起こった。1848 年前後にヨーロッパの各地で起こった民主化運動の挫折とともに、楽観主義的な進歩思想に対する懐疑が目覚めはじめ、それらの少数派によってショーペンハウアー哲学が担ぎ出される、という事態が生じたのである。このためにショーペンハウアーは逆に、時代の主流を占めていた近代市民たちの攻撃目標とされ、斬られ役として脚光を浴びるようになったのである。そして、厭世主義者、非合理主義者、性愛の哲学者、頹廃主義者、女性差別論者、自殺擁護者、などの、一部はいわれのないレッテルを貼られることにより、後のショーペンハウアー哲学に関する評価が定着し、それらがそのまま多くの哲学史の記述に再生産されていった。しかしまたそのように捏造されたショーペンハウアー像が、ニーチェ、トーマス・マン、フロイトらの著名な文人、思想家たちの登場の導火線ともなったのは歴史の皮肉というほかはない。

『意志と表象としての世界』初版について

入手が難しいとされる原著の初版が関西学院大学図書館の蔵書に加わったことは悦ばしい。思えば、カント全集(1838)の刊行にあたって、すでに忘れられていた『純粹理性批判』の初版の重要性を強調し、全集に収録するように刊行者ローゼンクランツに進言したのもショーペンハウアーであった。しかし現行のショーペンハウアー全集の方は、先に言及した『根拠律』にしても、この『意志と表象としての世界』にしても、後年加筆修正が施された最終版が収録されている。今回の初版購入によって、若きショーペンハウアーが著したままのオリジナルバージョンを確認することができるようになったことは、ショーペンハウアー哲学の成立過程を研究するため、いや、そもそもショーペンハウアー哲学を理解するためには成立史の研究が重要であ

ることをアピールするためにも有益なものとなろう。



『意志と表象としての世界』初版扉
Die Welt als Wille und Vorstellung: vier Bücher, nebst einem Anhange, der die Kritik der Kantischen Philosophie enthält, von Arthur Schopenhauer. Leipzig: F. A. Brockhaus, 1819.

鎌田 康男 (かまた やすお)

関西学院大学総合政策学部教授 Dr. phil.

著書:

- (1) *Der junge Schopenhauer. Genese des Grundgedankens der Welt als Wille und Vorstellung* (若きショーペンハウアー。意志と表象としての世界の根本思想の生成。単著、München: Alber, 1988)
- (2) ショーペンハウアー哲学の再構築。『充足根拠律の四方向に分岐した根について』(第1版) 訳解(共著、2000年、新装版2010年、法政大学出版局叢書ユニベルシタス) ほか。

論文:

- (1) 「構想力としての世界 — カント『純粹理性批判』演繹論の受容から見る初期ショーペンハウアー哲学の再構築 —」『理想』第687号 特集 ショーペンハウアー哲学の最前線(単著、2011年) pp. 2 ~ 22
- (2) 「バルジファル — 近代市民社会の中でのミットライト」『ショーペンハウアー研究』第5号(単著、2000年) pp. 57 ~ 76 ほか。

その他の著書論文等:

<http://www.kwansei.info/html/167.html> 参照。

ショーペンハウアー哲学をよりよく知るために:

- (1) ショーペンハウアー『意志と表象としての世界』西尾幹二訳、全3巻、中公クラシックス、2004年
- (2) ショーペンハウアー『幸福について — 人生論』橋本文夫訳、新潮文庫、1958年
- (3) 齋藤智志・高橋陽一郎・板橋勇仁編『ショーペンハウアー読本』、法政大学出版局、2007年